

ち

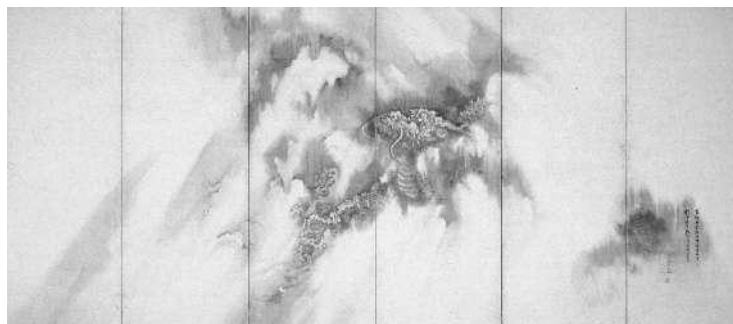
りめん街道・旧尾藤家住宅の奥蔵に残されていたさまざまな絵画の中から、江戸時代の京都で活躍した画家の岸駒^{がんこ}（1749～1839）が描いた六曲屏風^{うんりゅう}「雲龍図」を紹介します。

岸駒は岸派の創始者となった画家で虎を得意とし、岸駒以降、虎図は岸派代々のお家芸とされました。本図は、広報よさの2月号（No192）で紹介した岩山を駆ける虎を描いた「咆虎図^{ほうこ}」と対になり、六曲一双屏風「雲龍・咆虎図」の向かって右半分を構成しています。天保9年（1839）の記述があり、最晩年の作品とわかります。

水をたっぷり含ませた墨で、にじみをいかして描かれた雲の隙間から龍が顔と体の一部をのぞかせています。余白を大きくとることで、空の荒れ模様や長くうねる龍の巨体を見る者に想像させます。雨雲とともに描かれることの多い龍は、雨と密接な関係にあります。大事な家屋を火災から守る縁起担ぎであり、ま

た禅宗寺院の本堂では、会衆に仏法の雨が降り注ぐようにと天井に描かれたりもします。同じ理由からでしょうか、旧尾藤家住宅の仏壇の天井にも龍図が配置されています。

（与謝野町教育委員会）



岸駒筆「雲龍図」 紙本墨画 六曲屏風

三

河内郷土資料室に
収蔵している昔の

道具を紹介します。

各家庭に冷蔵庫や電気炊飯ジャー、電気もなかった夏、朝に炊いたご飯を腐らせずに保つことは、台所仕事の一大事でした。そこで活躍したのが飯笥めしざるです。

俳句では夏の季語にもなっている飯笥。炊いたご飯をおひつの代わりに笥に入れて涼しいところに置き、風通しをよくすることで次の食事まで腐敗を防ぎます。写真のものは置き型で高足になっています。底が湾曲しており、まんべ

なく風が当たる仕組みです。ふた付きのものや取っ手が付いて高い所につるすものもありました。炊いたご飯を直接笥にあけるのが本来の使い方ですが、蒸気熱による温度低下を期待して、固くしぼった布巾を底に敷いて使われることもありました。

電子レンジがなかった昔は、暑い夏の昼を乗り切っ



夏に活躍した飯笥

た冷やご飯を茶漬けや湯漬けにして温め直していましたが、それでも固さが残ったそうです。

三河内郷土資料室では、紹介の飯笥をはじめ夏用の飯籠めしかこなど、さまざまな昔の道具に触れて楽しむことができますので、ぜひお越しください。

《三河内郷土資料室》

■入館料

一般150円（中学生以下無料）

■開館日

土・日曜日（午後1時～5時）

※ 年末年始を除く

（与謝野町教育委員会）

三

河内郷土資料室に
収蔵している昔の

道具を紹介します。

現在は携帯電話やスマートフォンが広く普及していますが、家庭ではまだまだ固定電話が使われているのではないのでしょうか。ファックス機能や無線式の子機が付いたりもする今日の固定回線電話のご先祖にあたるのが、写真の「デルビル磁石式乙号卓上電話機」です。

箱の中には磁石式発電機が入っていて、ハンドルを回すことで電気信号が流れ、交換手のいる電話局へとつながる仕組みです。電話局からは交流電流を加入者に送って正面のベルを鳴らしました。脇に掛かっている受話器（スピーカー）を取り耳に当てて相手の声を聞き、話すときは箱の上から突き出たラップ状の送話器（マイク）に向かって話します。

受話器と送話器はやがて一体化されて、現代の電話機の形になっていくのですが、両端に受話器と送話器を備えた今でも、私たちは普通に送話器の部分を省略して「受話器」と呼んでいるのは興味深いですね。

三河内郷土資料室では、紹介した電話機や懐かしの黒電話をはじめ、さまざまな昔の道具に触れて楽しむことができます。ぜひお越しください。

《三河内郷土資料室》

■入館料 一般150円

（中学生以下無料）

■開館日時 土・日曜日

午後1時～5時

※年末年始を除く

（与謝野町教育委員会）



デルビル磁石式乙号卓上電話機（大正期）

時の贈り物 [第125回 与謝野の氏神祭り① 実は、江戸・明治時代には普通だった担い屋台]

与

謝野町内の春の氏神祭りでは、多くの

地区で屋台巡行が見られます。その種類は「芸屋台」「山屋台」「太鼓屋台(楽台)」の3タイプがあります。このうち、太鼓屋台は「曳き系」と「担ぎ系」の2タイプがあります。多くが曳き系屋台ですが、唯一、与謝の二ツ岩地区だけ担ぎ系の屋台が出されます。掛け声は「ヨイサー、ヨイヤサ」です。屋台に乗った太鼓役と笛役のリズムと担ぎ手の歩調を整えるための「間」として、時折、「ホ」や「ハ」を付けます。そのときは「ヨ

イサー、ヨイヤサ、ホ」となります。

実は、この担い屋台は明治時代までは後野や三河内などでも出されていました。今の後野は芸屋台をメインとする曳

き屋台巡行ですが、江戸・明治時代にはその中に担い屋台が混ざっていました。また、今の三河内は曳き系の山屋台と太鼓屋台がメインですが、このスタイルは明治時代以降に導入されたもので、江戸時代には曳き系の屋台はなく、担い屋台がメインでした。つまり、江戸時代から明治時代の屋台巡行には、担い屋台が普通にあつたのです。与謝の二ツ岩地区の担い屋台の巡行は、かつての姿を伝える唯一の存在と言えるものです。

(与謝野町教育委員会)



今では唯一の担い屋台を出す与謝の二ツ岩地区

時の贈り物 [第126回 与謝野の氏神祭り② 江戸時代から続く加悦の天満神社の神輿渡御]

加悦の天満神社は加悦・算所両地区の

氏神で、神輿は両地区内を渡御します（神輿の巡行を「渡御」といいます）。掛け声は「ヨイッサー」で、世話方の号令に追いかけて約40人の担ぎ手が一斉に声を上げます。号令が「ヨイッサツ」になると駆け足の合図です。重い神輿を大きく揺らして勢いよく進み、時に同じ所を何度も行ったり来たりして、観衆を大いに盛り上げます。観衆から「ヨイッサツ」の声が上がることもあり、一体感に包まれます。

神輿渡御は2日間にわたりに行われます。初日の宵宮に天満神社境内の神輿堂から長い石段を下り、各所を巡り三河内地区に近い算所グラウンド北側の御旅所に到着。1泊した神輿は2日目の本祭で各所を練り歩いた後に、宵宮と逆の順路をたどって155段の石段を登り、神輿堂に戻ります。

渡御に際して、神輿の前



宵宮に天満神社の石段を下りてくる神輿

をチリリン棒や大鈴といった鳴り物とともに、加悦区5町、算所区5町がそれぞれ一本ずつ出す幟^{のぼり}十本が進みます。神輿が停まる際に、これらの幟はまとまって立て掛けられますが、宵宮と本祭で並び順が異なります。算所の御旅所に向かう宵宮では算所が先に、天満神社の神輿堂に戻る本祭では加悦が先にと決められています。

ここ3年は新型コロナウイルス感染症の影響で実施されていませんが、威勢よい「ヨイッサツ」の掛け声に地区が沸き立つ神輿渡御の再開が望まれます。

（与謝野町教育委員会）

時の贈り物 [第 127 回 与謝野の氏神祭り③ 三河内^{ひき}曳山祭、山屋台の導入]

春

の三河内区の曳山祭は、倭文^{しどり}神社を

氏神として6町内会がそれぞれに祭礼屋台を曳き出します。6町内会のうち、山屋台を曳き出すのは、大道町内会・中坪町内会・上之町・奥地町内会の4地区です。三河内曳山祭の山屋台は峰山城下町型で、明治時代の初期に新たに導入されたものとされています。これ以前は、江戸時代から続く担^にい屋台を基調としていました。

山屋台の導入経過を記録した1次資料は少ないようですが、伝聞記録によると、その導入は、奥地町内会が峰山の織元町の山屋台を購入し、上之町が峰山の浪花町の山屋台を購入しました。三河内区の山屋台が峰山城下町型である理由はここにあります。また、大道町内会と中坪町内会は中古の屋台ではなく、新品を制作しました。その際も峰山城下町型で統一しています。なお、奥地町内会と上

之町の今の山屋台は、その後新調された2代目です。

祭礼屋台の制作には多額の経費がかかります。ましてや山屋台は、幕類も含めとても高額です。山屋台の導入は、織物産業の発展を基盤とした三河内区の経済力の上昇を最もよく示し、かつ、三河内区民の心意気の結晶でもあります。

(与謝野町教育委員会)



倭文山
(奥地町内会)



浦島山
(上之町)



八幡山
(中坪町内会)



春日山
(大道町内会)

時の贈り物 [第 128 回 与謝野の氏神祭り④ 岩滝祭と神輿の渡御]

与

謝野町の氏神祭りでは6つの神社で大人の神輿の巡行（Ⅱ渡御）が行われます。この神輿の渡御の時代的な変遷をみると、江戸時代の神輿渡御は天満神社（加悦・算所・後野区）、深田神社（幾地区）、板列八幡神社（男山区）の3神社ですが、明治時代以降になると板列

では各々1神社の計2神社のままです。明治時代以降は「岩滝祭Ⅱ神輿祭り」という特色ある個性を示すこととなっています。おそらく、旧岩滝民の気質に神輿の渡御が合致したのでしょう。

（与謝野町教育委員会）

● 岩滝地域



板列八幡神社（男山区）



板列稻荷神社（岩滝連合区）



水無月神社（弓木区）



木積神社（石田区）

● 加悦地域



天満神社（加悦・算所区）

● 野田川地域



深田神社（幾地区）

与

謝野鉄幹^{てつかん}の父親であ

る幕末期の僧侶歌人・与謝野礼厳（1823～1898）が文政6年に与謝野町に生まれてから、今年で200年となります。

温江の農家・細見家に生まれた礼厳は、加悦の淨福寺で修行し京都西本願寺の掛所・願成寺に入ります。幕末の動乱期、礼厳は本願寺の御用僧として北陸地方の勤王活動に従事しました。明治維新後には社会公益事業に奔走し、療病院や鉱泉場の開設に尽力するなど、民衆の健康維持に心を砕きました。

与謝野町に今も残る直筆の資料を紹介します。「詠茶哥^{えいちゃか}」と題されたこの扁額は、長歌の形式で喫茶の効能を軽妙に説いています。人はお酒によつて「身を破り家をほろぼす」とする一方で、「書を讀むたすけ」となり、さらに「ものごとにおびりをはぶく」など、お酒の害とお茶の徳を民衆にわかりやすく比較して見せている点が興味深い作品

です。

末尾は次のような和歌でしめられています。

宇道山^{うじやま}の木の芽はたしめあさ宵に心きよまりこころゆたけし

● 宇道山の木の芽

● お茶のこと

● たしめ●嗜め

この扁額は現在、江山文庫で展示中です。

（与謝野町教育委員会）



与謝野礼厳「詠茶哥」

令和5年12月1日、新規に3件を与謝野町指定文化財に指定しましたので紹介します。これらは江戸時代から明治・大正・昭和期の絹織物産業の繁栄を象徴するものです。

図 社会教育課 ☎ 43・9026

指定1

雲龍図綴錦

うんりゅうず つづれにしき

(後野区宮本町芸屋台「愛宕山」見送幕)



文政8(1825)年製作で、後野にある愛宕神社の氏神祭りで巡行した芸屋台に懸装した見送幕です。幕面中央に正面向き龍1頭を大きく配し、その下方の左右に内側に向き合う横向きの龍2頭と瑞雲、そして幕の下方に崑崙山を中央に挟んで、青海波を左右に描いた雲龍図綴錦です。

指定2

三仙人図綴錦

さんせんになず つづれにしき



金屋の氏神祭りで巡行した芸屋台に懸装した見送幕です。「瀑布

本幕のように額絵を見ないのは中国製をならった日本製の綴織物に多く、本幕は、江戸後期の文化爛熟期である文政年間(1818～1830年)に我が国で製作された綴織りの幕と想定されます。

指定3

黄地蜀江襷に 丸唐花文様 繡珍錦

きじしよっこうたすき
まるからはなもんよう
しゅちんにしき

(三河内区奥地町内会山屋台「倭文山」水幕)

三河内にある倭文神社の氏神祭りで巡行した山屋台の台高欄下の四辺周囲へ回し懸けて用いた水幕です。本幕の来歴は、峰山藩城下

を背景に談笑する三仙人の図」を綴織りで表しています。また、本幕は、昭和23(1948)年に後野区上之町の「蛭子山」から芸屋台とともに4万5000円で金屋区に譲渡されたものです。

本幕の綴織りは、図柄の横方向に経糸を配し、縦方向に絵緯糸を織り入れて図を織り表す西洋のゴブラン織りと呼ばれる毛綴織りに見られる織技法で、寛政年間(寛政2(1790)年)に特異といえる西洋の綴織技法ゴブラン織りをならった綴織製作がすでに行われていたことを示しています。



町の織元町が江戸時代に製作した山屋台「高砂山」を、奥地町内会が明治5(1872・※)年に幕類一式とともに購入したものです。

本作の図柄には蜀江襷文様に円寿字、卍字錦、盤長といった特徴ある中国様式の図様と構成、そして色調が見られます。清朝17世紀後半から18世紀中ごろまでの、特に精緻な織りが発達した時期に製作された宮廷用調度織物と推測され、日本への渡来は、江戸時代中末期から後期にかけてと想定されます。

※ 明治11(1878)年の説もあります